

## ウイグル王国における品位のある姿勢（講演要旨）

## アンネマリー・フォン・ガベン

私がここで取扱おうとするウイグル族は、チュルク語を使用した一部族であるが、かれらは、九世紀の中葉に、モンゴリア草原から東トルキスタンの、今日のトウルファン＝オアシスに移動し、そこで一つの王国をたてた。高昌とよばれるこの地域は、隊商路にあたっていて、古くから文化が栄えて富んでおり、そこでは常に商人と隊商・異国の旅人・僧侶・職人の姿が見られた。したがって、その住民は、異様な遠い世界に馴れしたしみ、それらの「物の考え方」を容易に受け入れた。

ウイグル族は、高昌に拠るまでは半遊牧民であったが、移動後は、定着・農耕生活に、極めて迅速に適応した。しかし一方では、依然、馬の飼養を続け、夏季には、好んで高原に移って、テント生活をしていった。

かれらがやってくる前に、高昌に住んでいたのは、ウイグル族以外のチュルク系諸部族、多くの中国人、いわゆる「トハラ人」、ソグド人、幾らかのシリア人であったが、そのほかに、常住せぬ、さまざまな外国人もいた。

東トルキスタンには、三つの異った芸術様式がつぎつぎに行われた。すなわち、一番古いのはインド＝ヘレニスティック様式、第二のものはイラン人および「トハラ人」の様式、最後のものはウイグル族および中国人の様式であった。和闐と亀茲と高昌とが、それぞれ、これら三つの芸術様式を代表する地域であった。多くの考古学的遺物が、今やすでに過去のものとなったこれら諸文化を、今日なおはっきりしめしてくれる。高昌の壁画には、かなりしばしば、寄進人の姿が見られるが、有難いことに、時には、その脇に書かれた銘文（第十三図）によって、その人物が何人であるかがわかる。もしその描かれた人物の名前・官名、そのほかの附加的な語がチュルク語ならば、その絵画はたしかにチュルク人、もしくはさらに、ウイグル人をしめしている。これらの人物は、その外観・姿勢からみて、それ以前の亀茲、また高昌における「トハラ人」（およびソグド人？）と非常に異っている。だから我々は、ほかならぬウイグル人が、服装と姿勢、原住民と外国人に関して、どのようなものを品位あるものと見なしていたか（the Uigur's idea of dignity）

という問題について考えうるわけである。

チュルク人は、歴史上、きわめてしばしば、社会の秩序への深い関心、つまり、国家をたて維持する基本的能力をしめした。このことは、いま問題にしようとする絵画のなかで、高位のものと低位のもの、保護するものとされるもの、さらにお互い同志が、形式上の相異によってしめされていることにあらわれている。

ウィグル以前の「トハハラ人」の様式では、多くの物語の光景を、同一の絵画のなかへ小さく沢山つめこんで描き、そのなかの人物もせわしい動きをしめしているが、ウィグルの画家たちは、これとは反対に、一つのはっきりした構図を愛した。つまり、品位と、一点に集中した瞬間とを、より好んで描いたのである。かれらが理想とした構図は、中央に一人の仏陀がいて、それを天上昇・地上界の聖者、信者たちが取り巻き、みんなが中央の仏陀の方を向いているというかたちである(第四図)。仏陀が、その「三三相(Tatsana)」の幾つかをもっているため、容易にそれとわかる場合でも、なおかつ、ウィグルの画家たちは、その仏陀の姿をとくに大きく描くことによつて、それがほかとは異つて尊び敬わるべき存在であることを、もっととはっきり表現しようとした。だから、その仏陀を取り巻く聖者たちは、より小さく描かれている。しかしまた、同じ絵画の脇とか下の方にみえる何らか身分の低い、いな、王室出の寄進人でさえも、さらにこれらより数等小さく描かれているのが普通である。こういうやり方で、その全ハイラーキーが、一目瞭然、自然にわかるようになっていたのである。

ウィグル王国における品位のある姿勢 フォンリガベン

私は、上述の寄進人や、また、何らかこの世の光景をあらわした絵画にみえる人物を、この講演の主要な材料にしたいと思う。これに対して、仏たちや天上界の存在に関する絵画は、ただ昔の原型をそのまま墨守したかたちで描かれているにすぎぬと思われるので、ここでは、主としては、取扱わない。

ウィグル人のすわりかたを考えるにあたって、まず知りたいと思うのは、かれらが、比較的後世の中国人のように、椅子を用いたかどうか、という点である。「トハハラ」の壁画、つまり、ウィグル以前の様式のものにあつては、人々は、大体普通には、高さ三五頤位の腰掛に腰かけた。また、仏陀とか王族など、尊い人物は、一寸した敷物を前に垂らした、一種の肘掛椅子をさえ使った。このような「トハハラ」の絵画にみえる、両脚を交叉させて、床に足をつけず、中途でぶらつかせている姿勢は、あまり楽な恰好ではなかったにちがいない。また、なかには、片脚は斜めにしてぶら下げ、他方の脚は腰掛に置いているものもある。その少し前に西方からもたらされたばかりの腰掛に、はじめのうちは、こういう恰好ですわったのだらうと思われる。

ウィグルの絵画にみえる人々のすわりかたは以下の通りである。巻物を読んでいる一僧侶は、机の前にすわっているが、これは恐らく、腰掛を使つたのであろう。同じく、一脚の机の前にすわって書きものをしているマニ教徒たちも、(第七図)、何らか腰掛を用いたものと思われる。訶利帝母神(鬼子母神、Harti)は、立派な腰掛に腰かけているが、その形は、亀玆の壁画にみえるものと大体同じ

である。この絵画がウィグルのものであるにしても、その腰掛はウィグルの創始したものではなく、純粹に「トハハラ」のものである。

仏教の師たちは、一種の講座（曲録、*cathedra*）にすわった姿勢で描かれている。この絵画が、その同時代の方式をしめしていることはたしかである。というのは、これら師たちの前にいる僧侶たちが、これは「トハハラ人」、これはウィグル人として、はっきり見分けられるからである。「トハハラ人」は、外国人の顔だちをしていて、その書物の体裁も「トハラ式」、つまり、ゆわえる紐がページの左側にある。これに対して、ウィグル人僧侶は、その本来の顔つきをしていて、ゆわえ紐も、ウィグルの書物に普通の如く、ページの右側にある。これらの図から考えると、講座（曲録）・腰掛（*ベンチ*）を使うのは異例のことである（第五図）。

あぐらをかくのも、また、一般の人々のすわりかたではなかったらしい。仏たちのほかでは、冥想にふけり、書見台を前にして読書し、または、両膝に書き机をのせている僧侶たちは、あぐらをかいてすわっている（第六図）。地藏菩薩（*Ksitigarbha*）の図、つまり、地獄にいる人々のなかでは、ただ一人だけがあぐらをかいているにすぎない。

見たところ、楽なすわりかたは、膝をつき、足の裏を上向けて、脹脛の上に腓をおろすやりかただったらしい。このすわりかたをしているものとして、寄進人たち（第九図）、菩薩の地上での行を睜めていると覺しき幾人かの僧侶、何か宗教的演奏に聴きいり、また、

祈願しているマニ教徒たち、野獸の一群を前にした若者、画家、楽師（第八図）、鳥を放っている男などがあるが、さらに、はげしい労働をしているものさえも（第三図）、このようにすわっている。中国の身分のある一婦人は、敷物に、こういう恰好ですわっているが、両脚は、丁度日本の婦人がやるように、少し右側に出している。

両膝をついて、腰をたてるすわりかたは、非常な尊敬をあらわす際の、ごく普通の姿勢である。有名な誓い（*Pañcī*）の光景をあらわした絵画では、昔の寄進人が脹脛の上にすわって、仏陀に捧げものをしている。しかし、この同じ人物が、この同じ絵画のなかに、仏陀の別の側にも描かれていて、仏陀から授記（*vyākaraṇa*）を授かっているが、ここでは、この人物は、腰をたてている。また、幾つかの絵画では、身分のある男女が一緒にたて、仏陀に礼拝しているが、大体普通には、女は腰をたてて膝をつき、男は脹脛の上に腰をおろしており、僧侶たちは、もっとうやうやしいすわりかたをし、腰をたてている。

片膝をたててすわるのは、イスラーム諸国では、コランを学ぶ弟子のすわりかたであるといわれているが、これは、その師が命ずれば、何時なんどきでも、立ってこれに応じなければならぬからである。つまり、これは、一番早く立ち上がれる姿勢なのである。

このようなすわりかたは、誓いの光景のなかの、捧げものをしているクシャトリヤと商人たちに見られる。ただ一例、授記を授かっている一人の人物が、こういう恰好で描かれてゐるが、これは、例外的に、すでに蓮華の座にささえられた僧侶なのである。ごく一般

的には、片膝をたててすわるのは、注意を集中しているとき、精神的に緊張しているときの姿勢であって、狩する人、長老須菩提（Shubhuti）、鍛冶屋とその徒弟などに見られる（第十圖）。「トハラ人」もまた、すでに、このすわりかたを知っていたのであって、手をせわしく動かしている僧侶の恰好はその一例である。

すわる姿勢の一つとして、最後に、馬に騎る恰好についても述べなければならぬ。「トハラ」の騎士は、普通、両脚を鞍帯の前につき出し、爪先は下に向けて騎った。これに対して、ウィグルの騎者は、両脚を自然に下げて、爪先は前に向けて馬上の人となった。つまり、これは、きわめて自然な、ことさら奇をてらわない騎りかたである。

仏陀に語りかけ、また、捧げものをするのは、多くの場合、立つて行なわれた。一族全員が描かれた画があるが、その家長は、膝をついて、仏陀の蓮華の座をささえている。その両側にいる男性の一族は、その家長の方を向いており、騎士たちは腰脛に腰をおろし、僧侶たちは膝をついている。しかし、家長の左側の一人物は立っている。見たところ、この男は、捧げものをしている祈願人であるらしい。第二の絵画では、その同じ家族の女性一族がしめされている。彼女らは全部、腰をたてて膝をつき、主婦の方を向いている。ただ一人の若い母親だけがそちらを向かずに、赤坊を<sup>あかやう</sup>看ている。

トルファンから発見せられたただ一枚の絵画だけに、両膝をたてて脚をくみあわせ、膝の上に肘または手をのせた、身分のある婦人が二人見られる。しかし、その服装は「トハラ」式であるから、

ウィグル王国における品位のある姿勢 フォン・ガベン

かれらはチュルク人ではない。

以上要するに、ウィグル人は、日常生活では、普通には、椅子とか腰掛とかは使わないで、敷物の上に直接すわった。その楽なすわりかたは、膝をつき、足の裏を上向けて、腰脛の上に腰をおろす姿勢であった。もっと尊敬の念をあらわすときには、婦人と僧侶とは、腰をたてて膝をつくのが普通だった。何かを捧げたり、誰かに語りかけたりする際には、立つて行なった。

前に一言した敷物は、高昌では、多くの場合、おそらくフェルト製だったと思われるが、それらは白色で、新しいフェルトの一枚一枚をしっかりと重ね合わせるために、赤い波形の線で飾られている。時としては、この飾りの線は、とげのついたきわめて細い巻き菱模様のかたちをしているが、これは、あまりに細くて、到底、フェルトには縫いつけられそうにもない。だからこの模様のある敷物は、毛織物製だったのであろう。これらほど多くはないが、また、アブリケで模様のつけられた敷物がある。この型の敷物の実物は、龜茲からは発見されていない。

誰かほかの人に服従したことをしめすには、両手をくくるか、全く無力であるという恰好をあらわさねばならない。まごころ、服従の心は、指先を上に向けて合掌するか（第九圖）、両手をそれぞれ他方の袖口にさしこむこと（第十一圖）によってしめさる。聖典を読むときには、両手は上のように合わせず、指で書物の行を追っている（第五圖、右の人物）。

合掌のすがたは、きわめてしばしば、崇敬の心をしめす人々、つ

まり、地蔵の国（地獄）で懺悔する人たち、この世での何らかの光景を睨めている僧侶たち、寄進人たち（一中国婦人、寄進人の全家族など）、仏陀の前にある須菩提、祝福をうけるもの、そのほかにみられる（ただ、まれに、僧侶のなかには、印を組んでいるものもある）。

袖口に両手をさしこむ恰好は、マニ教徒の俗人そのほかにしめされている。吟唱する人でさえも（第八図）、こういう姿勢で描かれている。

時として、一人の人物、例えば尼僧が、何か捧げものを手にしているが、それは、両手にささえたい長い花の枝であることが多い（第十三図）。

寄進人の両手は、時として、長い袖で覆いかくされている。例えば、両手に何か平たいものを持って、ボクタク帽といわれる背の高い帽子をかぶり、膝をついた婦人、仏陀の蓮華の座をささえている家長、同じく主婦、両側から蓮華の座と一緒にささえている身分のある男女、同じく男などがそうである。しかし、同じ姿勢をしている一僧侶の両手は覆われていない（第十二図）。

ところで、どう考えてよいのか、はっきりわからないのは、つぎの事実である。すなわち、ある人物たちの両手はそれぞれ他方の袖のなかに隠されているにも拘らず、長い花の枝が、手には直接持たれないで、胸の前に割合高く描かれているのである（第十一図）。これらがみんな、画家の誤りである、というわけにはゆかない。ある絵画では、身分のある男が一人描かれているが、それらはみんな、

上述のような長い花の枝と一緒にしめされている。しかし、その花の枝を、両手を出して握っているものと、そうではなくて、両手は袖口のなかへさしこんで、それを手で持っていないものとが、かわるがわる一人おきに描かれているのである。これは見たところ、決して自然な「姿勢」ではなくて、この花の枝に、何か象徴的な意味があるにちがいない。そこで、この花のついた枝は、精神界、つまり、死者の象徴（シグナル）であるとは考えられぬだろうか。そうすると、両手ではっきりと枝をささえている人物は、その死後に追悼のために描かれたもの、これに対して、袖口に両手をさしこんでいる人々は、そのまだ生きているときに描かれたが、その死後になつて、花の枝が、その人の徳を讃えて、あとから描き加えられたものと考えて考えられなくないと思われる。しかしこれは、あくまで大胆な推論にすぎない。

はきものは、すわり、膝をつくのに相応じている。ウィグルは普通には、硬い材料でつくったはきものは用いなかった。足をむき出しにするのは、品位のあることとはみなされなかった。ただ、はげしい労働をする人々だけが、裸足で描かれたのである（第三図）。遊びまわり、子供っぽい遊戯をし、恰も夏季におけるように、一寸したスカーフと腕輪のほかは全く衣服をつけていない子供たちは、何時でも一種のスリッパをはいている。この恰好は決して恥かしいことではなかった。というのは、その同じウィグルの画家たちは、幸にも男児として浄土（Sukhavati）に再生した子供たちを、まさにそのように描くのに、些かの躊躇をもしなかったからである。こ

のことは、龜茲の風習とは全く反対である。龜茲では、仏陀もまた、はきものを履いていないが、ウィグルの残した高昌の絵画では、仏陀は常に足を履いている。しかし、それは、この世の人間が普通に履くものとは多少異っていて、一種のサンダルである（第四図）。仏陀は王家の出自であり、もっとも品位あるものであったから、日夜働くものと同じようには、どうしても描かれえなかったのである。

ウィグル人と中国人とは、肉体について、古代ギリシヤ人とはちがった感じかたをしていた。身分のあるものは、男も女も、できるだけ品位を保つような服装をするのが普通であった。身分のある女は、そのはきものでさえも見せないし、尼僧たちでさえも、頭髪を覆っていた。神々、女神たちは、この世の人間、一般人ではないから、ただ、古い昔の原型をそのまま墨守して描かれている。（つまり、堂々たる王冠、多くのスカーフ、頸飾りをつけてはいるが、身体はややむき出しにされている）。したがって、これらは、それほど考慮には値しないのである。

ごく普通のはきものは、何か厚い材料でつくられ、黒色で、一寸飾りのついた一種のスリッパだった。錦地は、ただ、天上界の存在にだけ見られる。戸外では、身分のあるものもそうでないものも、男は、長靴を履いたが、その両側に平紐がついていて、帯のところで留められている。ウィグルは、皮革を硬くすることはしなかったようである。馬に騎って行くときには、男は長靴は用いず、すべすべした靴を履いた。すなわちこれだと、両側があぶみですれて破れることがないからである。時としては、簡単な板状のものの縁辺に

穴をあけてリボンを通し、足をその板の真中にのせて、そのリボンをも、その板が各人の足にぴったりするように、ひっぱっているものもある。巻き脚絆はあまり見られないが、それらは、中国のそれに似ている。

帯は重要であつた。帯はおそらく皮革製で、立派な細工の、同じ大きさの青銅または黄金の金属片をならべて飾られているが、これらは、最近、イエニセイ河上流域の古代キルギズの遺跡から、ソヴィエトの考古学者たちの手で発掘せられたものと全く同じである。これらの青銅片のなかには、物をぶら下げるための環のついたものがあるが、この環にはまた、飾りがついている。下げ飾りの幾つかには、何もついていないが、或るものには、ナブキン、ナイフ、おそらくは箸と思はれるもの、雖そのほかの日常用具が下げられている（第一図）。この、何もついてない下げ飾り、およびいろんなものをついた下げ飾りの数は、その人物の身分によって異ったもののように思われる。身分の低い男は、こうした飾りのついた帯はしめなかつた。また、全く同じ道具のセットが一組づつ、帯の両側に下げられていることもある。あるいはこれらは、実用に供せられたのではなく、ただ或る官位をしめしたに過ぎぬのではなからうか。

一般の男の頭髪は、頭のうしろで結びあわされて、しばしば黒色の、薄い布または帽子で覆われて、赤いリボンで締められているが、このリボンの短い端は、うなじまで下ってきている（第二図）。これに対して、身分のある男の帽子は、顎の下で、赤いリボンで結ばれた（第一図）。頭髪は一本つつの房をなして垂れ下っていたが、

これは、玄奘が、六二九年にタラスで、西突厥の可汗に会ったときのこととして敘べているのと全く同じである。

一番身分の高いもののかぶりものとしては、三種類数えられる。つまり、(1)先端に三つの突起のあるかぶりもの、(2)そのてつべんに黒色の扇状の飾りのある平たい小さい帽子(第九図)、(3)ティアアラ冠(Tiara)と呼ばれるものに似た、桃の実のやうな形の冠がそれである(第十一図)。

このような高位をしめす帽子は、また、ほかの上流人士の間にも転用されるようになったと思われる。マニを描いたと覺しき一枚の絵画には、マニ教僧侶にありきたりの、背の高い錦地の帽子をつけた神々しい一人物が見えているが、その帽子には、先端に三つの突起のある頭飾りがつけ加えられている。これは、マニを全人類最高の王者としてしめすためだったと思われる。また、(1)と(3)とのかぶりものは、一寸かたちを変えて、また楽師たちによっても用いられているが(第八図)、にも拘らず、これら楽師の帯には、何も下げられていない。だからかれらは、決して貴族ではありえないのである。ここで思いおこされるのは、後世のイスラーム時代になつて、詩人が、詩人のうちの「スルターン」という称号を帯びえたということである。いま問題にしているかぶりものは、おそらくは、後世の「スルターン」の称号の如く、なみなみなぬ才能をもった芸術家にあたえられたのであろう。このことは、ウィグル人のあいだで芸術が重視せられていたことをしめしている。

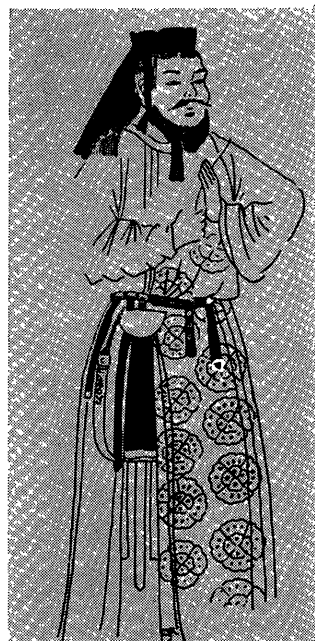
身分のあるものも、一般のものも、男は、「トハーラ」の人々の

ように宝石を使うことはしなかった。身分のある婦人は、耳飾りに宝石を用いたが、それは、時として非常に大きくて重いもので、頭髮には、豪華な飾りをつけた。身分のある男の飾りは、青銅または黄金細工のついた帯、兜の細工、剣・短剣・弓・矢筒の形状、馬具の裝飾だった。身分のある男が、耳飾りをつけた絵画があるが、それはチュルク人ではない。何故ならその男は、ウィグルとは全く別の服装をしているからである。

以上、我々は、ウィグルが定着・農耕民の世界に入りこんで、そこでの新しい秩序の要求するものを撰取したことを見てきた。かれらは熱心に、その地域の様式に適應しようとした。しかし、かれらには、或る精神的な力があつて、それによってその地で全く新しい形式をみつけ出し、かれらの、社会的地位・品位・秩序を尊重する心を、さらに發展させたのである。(護雅夫訳)

(ハンブルク大学教授)

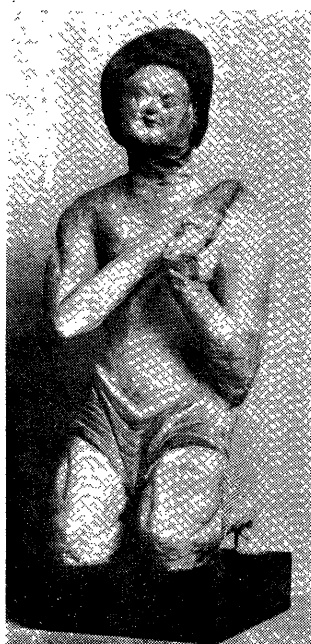
第一図



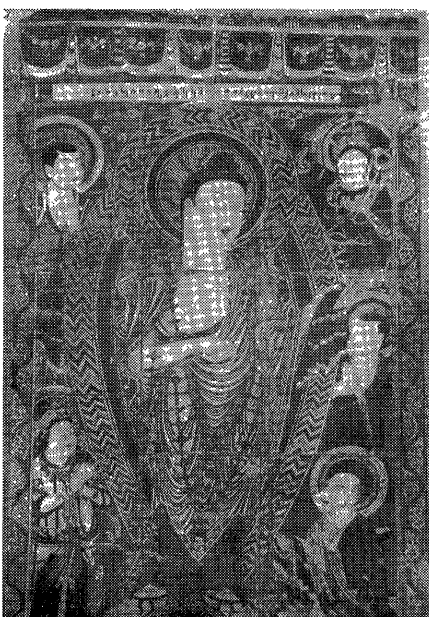
第二図



第四図



第三図

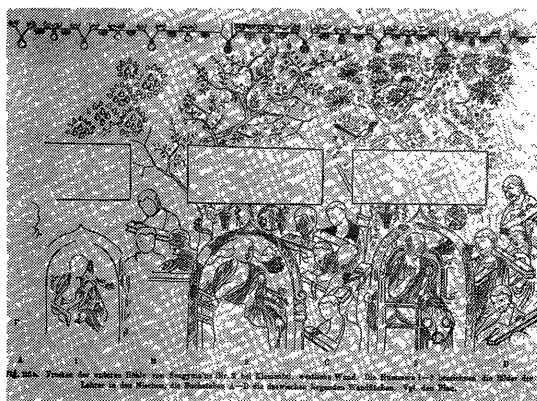


ウィグル王国における品位のある姿勢 フォンllガベン

第四十五卷 三八五



第五圖



第六圖

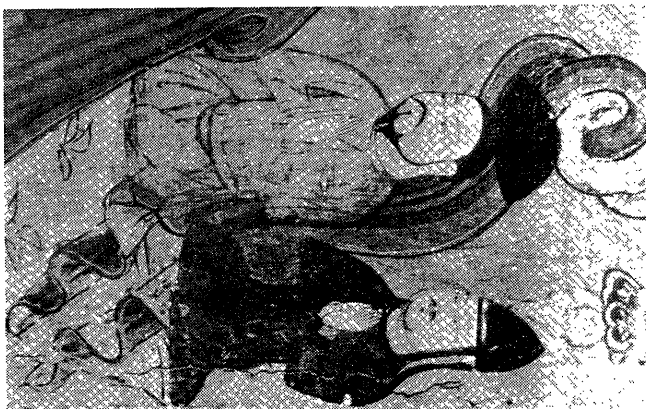


第八圖

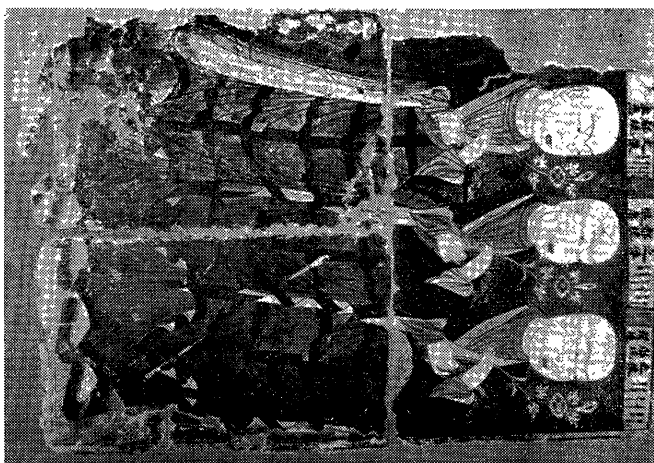




第七図



第九図



第十三図

ウィグル王国における品位のある姿勢  
フォンリカベン

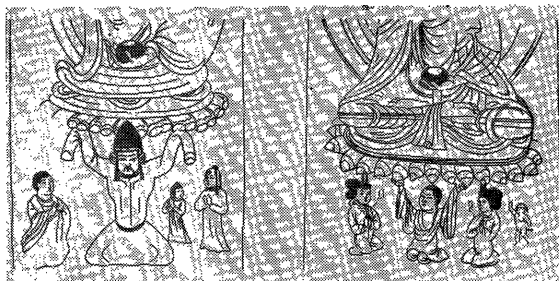
第四十五卷  
三八七



第十圖



第十一圖



第十二圖